

## 2019年度 日本大学大学院理工学研究科 物理/量子理工学専攻 場の理論特論II レポート4

提出締め切り: 2020年1月15日(水) 23:59:59 JST

提出先: ohya@phys.cst.nihon-u.ac.jp

または駿河台校舎8号館2階823D室

### 問題. Faddeev-Popov のゲージ固定処方

次の領域  $D$  上の2次元積分を考える:

$$I = \int_D dx dy \exp(iS(x, y)), \quad D = \{(x, y) : 0 < x < \infty \ \& \ 0 < y < \infty\} \quad (1)$$

ここで,  $S$  は  $x$  と  $y$  の関数で, 次のスケール不変性を満たすとする:

$$S(xe^{-\theta}, ye^{+\theta}) = S(x, y), \quad \forall \theta \in (-\infty, \infty) \quad (2)$$

以下では,  $(x, y)$  をゲージ場, 領域  $D$  をゲージ場の配位空間,  $S(x, y)$  をゲージ理論の作用, スケール変換  $(x, y) \rightarrow (xe^{-\theta}, ye^{+\theta})$  をゲージ変換, 式(2)を作用のゲージ不変性, 式(1)をゲージ理論の汎関数積分に見立てて, ゲージ固定 (ゲージ群の体積の分離) を行う. 以下の問いに答えよ.

(i) 式(2)を満たす様な関数  $S(x, y)$  に対しては次の等式が成り立つ事を示せ:<sup>\*1</sup>

$$S(x, y) = S(xy, 1) = S(1, xy), \quad \forall (x, y) \in D \quad (3)$$

(ii) 変数変換  $(x, y) = (re^{-\theta}, re^{+\theta})$  (但し  $r \in (0, \infty)$  及び  $\theta \in (-\infty, \infty)$ ) を施すと積分(1)は次の様に書き直される事を示せ:

$$I = \left( \int_{-\infty}^{\infty} d\theta \right) \int_0^{\infty} dr^2 \exp(iS(r^2, 1)) \quad (4)$$

因子  $\int_{-\infty}^{\infty} d\theta = \infty$  はゲージ群の体積を表す. これは無限大なので積分(1)は well-defined では無かった事に注意. 以下ではこの様な変数変換を行わずに, 積分(1)からゲージ群の体積を分離させる事を考える.

(iii)  $(x, y) \in D$  を任意に固定する. この時,  $\theta$  を  $-\infty$  から  $+\infty$  まで変化させて行く事で点  $(xe^{-\theta}, ye^{+\theta})$  は  $D$  上で或る軌道を描く. この軌道を図示せよ<sup>\*2</sup>. この様に, ゲージ変換のパラメータ  $\theta$  を動かして行った時に描かれるゲージ場の配位空間上の軌道をゲージ軌道 (gauge orbit) と呼ぶ.

(iv) 全てのゲージ軌道を一度だけ横切る曲線  $y = f(x)$  を1つ見つけよ.

(v) 全てのゲージ軌道を一度だけ横切る曲線  $y = f(x)$  がただ1つの解になる様な方程式

$$F(x, y) = 0 \quad (5)$$

を考える<sup>\*3</sup>. この様な関数  $F$  をゲージ固定関数 (gauge-fixing function) と呼ぶ. いま, ゲージ固定関数が1つ与えられたとしよう. この時, このゲージ固定関数を用いて領域  $D$  上の関数  $\Delta_F(x, y)$  を新たに次で定義する:

$$[\Delta_F(x, y)]^{-1} := \int_{-\infty}^{\infty} d\theta \delta(F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta})), \quad (x, y) \in D \quad (6)$$

この様にして定義された関数  $\Delta_F(x, y)$  はゲージ不変である事, 即ち次の等式を満たす事を示せ:

$$\Delta_F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta}) = \Delta_F(x, y), \quad \forall \theta \in (-\infty, \infty) \quad (7)$$

この  $\Delta_F$  を **Faddeev-Popov 行列式** (Faddeev-Popov determinant) と呼ぶ.

<sup>\*1</sup> ヒント: 等式  $S(x, y) = S(xe^{-\theta}, ye^{+\theta})$  でパラメータ  $\theta$  を  $\theta = -\log y$  又は  $\theta = \log x$  と選べば良い.

<sup>\*2</sup> ヒント:  $xy$  という組み合わせはゲージ変換  $(x, y) \rightarrow (xe^{-\theta}, ye^{+\theta})$  の下で不変なゲージ不変量である事に注意すると, ゲージ軌道は  $xy = \text{const}$  で定まる曲線と与えられる事が分かる.

<sup>\*3</sup> 曲線  $y = f(x)$  が分かっているならば  $F(x, y) = y - f(x)$  とすれば良い.

(vi) 次の2つのゲージ固定関数に対する Faddeev-Popov 行列式を求めよ.\*4

$$(a) \quad F(x, y) = x - y \quad (8a)$$

$$(b) \quad F(x, y) = y - 1 \quad (8b)$$

(vii) 定義(6)より任意の  $(x, y) \in D$  に対して次の等式が成り立つ:

$$1 = \Delta_F(x, y) \int_{-\infty}^{\infty} d\theta \delta(F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta})), \quad \forall (x, y) \in D \quad (9)$$

この恒等式を積分(1)に挿入すると次が得られる:

$$\begin{aligned} I &= \int_D dx dy \exp(iS(x, y)) \times 1 \\ &= \int_D dx dy \exp(iS(x, y)) \times \Delta_F(x, y) \int_{-\infty}^{\infty} d\theta \delta(F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta})) \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} d\theta \int_D dx dy \Delta_F(x, y) \delta(F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta})) \exp(iS(x, y)) \end{aligned} \quad (10)$$

作用のゲージ不変性(2), Faddeev-Popov 行列式のゲージ不変性(7), 及び積分測度のゲージ不変性\*5を用いると, 式(10)は次の様に書き直せる事を示せ:

$$I = \left( \int_{-\infty}^{\infty} d\theta \right) \int_D dx dy \Delta_F(x, y) \delta(F(x, y)) \exp(iS(x, y)) \quad (11)$$

これで問(ii)の変数変換を行わずともゲージ群の体積が分離出来た. 以上が Faddeev-Popov のゲージ固定処方である.

(viii) 問(vi)で用いた2つのゲージ固定関数それぞれに対して, 等式

$$\int_D dx dy \Delta_F(x, y) \delta(F(x, y)) \exp(iS(x, y)) = \int_0^{\infty} dr^2 \exp(iS(r^2, 1)) \quad (12)$$

が確かに成り立つ事を示せ.

\*4 ヒント: デルタ関数に対して成り立つ等式

$$\delta(f(x)) = \sum_{x_0 \in \{x: f(x)=0\}} \frac{1}{|f'(x_0)|} \delta(x - x_0)$$

を用いると, 式(6)右辺の積分は次の様に評価される:

$$\int_{-\infty}^{\infty} d\theta \delta(F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta})) = \sum_{\theta_0 \in \{\theta: F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta})=0\}} \frac{1}{\left| \frac{d}{d\theta} F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta}) \Big|_{\theta=\theta_0} \right|}$$

要するに,  $(x, y) \in D$  を任意に固定し,  $F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta})$  を  $\theta$  の関数だと思って方程式  $F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta}) = 0$  を  $\theta$  について解いて, その解  $\theta_0$  を用いて微係数  $\frac{d}{d\theta} F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta})|_{\theta=\theta_0}$  を計算すれば Faddeev-Popov 行列式は得られる. ゲージ固定関数(8a)(8b)に対しては方程式  $F(xe^{-\theta}, ye^{+\theta}) = 0$  の解  $\theta_0$  は1つしか無い事, 及び解  $\theta_0$  は一般に  $x$  と  $y$  の関数として与えられる事に注意.

\*5 ここで言う積分測度のゲージ不変性とは,  $(x', y') = (xe^{-\theta}, ye^{+\theta})$  とした時, 任意の  $\theta \in (-\infty, \infty)$  に対して  $\int_D dx dy = \int_D dx' dy'$  が成り立つ事を指す.